

令和6年度 SDGs インクルーシブ教育システム推進事業

# 第2回インクルーシブ教育推進フォーラム

共に学び、共に育つ学級、学校、地域をめざして自分ができること  
— 共生社会を形成する一人として —



11月27日(水) 13:30~15:40  
高周波文化ホール(新湊中央文化会館)小ホール

【日程】

13:00 13:30 13:40

14:55 15:05

15:35 15:40

受付	開会式	講演 75分	休憩	意見交換 全体交流 30分	閉会式
----	-----	-----------	----	---------------------	-----

【講演】

働く幸せ実現のために  
「社員から教わったこと」  
講師：日本理化学工業株式会社  
代表取締役社長 大山 隆久 氏



【意見交換・全体交流】

「インクルーシブな社会の実現のために、自分ができること」  
「わたしの学級、学校のインクルーシブ教育システム推進の現状」  
「わたしの職場、地域等のインクルーシブ社会の現状」

参加者

教職員、保育士、教育関係者、  
PTA、保護者、福祉関係者、  
医療関係者、企業関係者、学生、  
インクルーシブ教育に関心のある人

# 講演

## 働く幸せ実現のために「社員から教わったこと」

日本理化学工業株式会社 大山 隆久 氏



社員の約70%が知的障害者である日本理化学工業株式会社の障害者雇用のきっかけ、社員の方々がそれぞれの役割を果たして働いている様子、製造ラインをほぼ100パーセント知的障害者のみで稼働できるように工夫を凝らしている点、年間スローガン等について講演いただきました。

また、大山氏が大事にされている「人間の究極の幸せ」（人に愛されること、人からほめられること、人の役に立つこと、人から必要とされること）、「相手の理解力に合わせる」、「素直な心で相手を受け入れる」、「役に立つ幸せ」、「誰もが生きやすく、働きやすい皆働社会」等の経営理念や今後の目標について教えていただきました。

### 参加者の感想から

大山社長のお話は、本当にリアルで考えさせられるものでした。弊社でも社員一人一人を戦力にすることを掲げています。財源に対してシビアな中での雇用を行っている日本理化学工業株式会社の本気度は全く違うと感じました。とても励みになりました。（企業関係者）

「できることに目を向ける」「相手が理解できないのは教える方がいけない」「教えることをあきらめるな」「いらない鎧を下ろさせてくれる人たち」等、心に刺さるワードをたくさん聴けました。大山社長の社員へのリスペクトが感じられ、心が洗われるようでした。私も、どの人も受け入れようという気持ちになりました。（教職員）

実際に障害者雇用を行っている企業の話聴く機会がないので具体的な話が聴くことができて良かった。また人としての大切なことを教わった。（福祉関係者）

最後の、「障害者」という言葉がなくなることを目指すというお話が特に心に残った。人間誰でも得手不得手があり、得意な部分を最大限に伸ばしていくことが学校教育にできることであれば改めて気づくことができた。（教職員）

## 【テーマ】 【意見交換・全体交流】

「インクルーシブな社会の実現のために、自分ができること」  
「わたしの学級、学校のインクルーシブ教育システム推進の現状」  
「わたしの職場、地域等のインクルーシブ社会の現状」



講演後には、教育、福祉、医療、企業、学生等のいろいろな立場の者同士での意見交換を行いました。全体交流では、大山氏への質問やグループで話し合ったことについて発表しました。大山氏からは「一人一人が思いをもって行動していくことが大きな力になる」「能力ではなく人間性が大切」等、質問や発表に対するコメントをいただきました。

インクルーシブ教育推進というテーマで、教育現場からの視点、福祉・医療関係など様々な方々が集まり、相互理解をしていく場としてとても大切な時間をいただけたと思います。（企業関係者）

### 参加者の感想から



様々な立場の方々と意見交換をする中で、「今までの考え方が変わった」という方もいらっしゃいました。講演を聞いた後、参加者がアウトプットすることで気づきが多い場になったと思います。（教職員）

小学校や中学校、高等学校や特別支援学校等、異なる立場の教員だったので、心がけていらっしゃることを自分の学校や地域の、それらの立場の人のことを思いながら聞かせていただきました。共通していたことは「いずれみんなと、いずれは地域へ」でした。「共に生きる」ことの大切さを学ばせていただきました。（教職員）

他業種の方の意見を聞くことができよかったです。「ありがとう」という言葉は「自分もできる」「認められた」という自己肯定感につながり、生きている実感につながるという話が印象に残りました。（教職員）

## 意見交換グループの記録の一部

第2回インクルーシブ教育推進フォーラム 意見交換 記録用紙

### 「インクルーシブな社会の実現のために 自分ができること」

- ・ 自己肯定感 up のため… 前向きな声かけ
- ・ 悩みにじっくりと寄り添い、付き合う  
↳ 持つ力を発揮することができるようになる
- ・ 交流級と繋ぐ… 本人の特性への理解
- ・ 教職員に向けて 理解をうながす
- ・ インクルーシブとはいえども、社会的ルールは守ることができるよう 伝え続けていく。

第2回インクルーシブ教育推進フォーラム 意見交換 記録用紙

「インクルーシブな社会の実現のために自分ができること」

- ・ 校内での理解啓発が必要  
声を大きくアピール(管理職・教員)
- ・ 交流級で困ったことがあった時、理由などを他の児童に伝えていく必要がある。障害者への理解をうながす。
- ・ 自分自身が役に立っているという自己有用感を一人一人がもつことが必要。一人一人の長所を自覚できるようにする。

### 「私たちができること」

- ・ インクルーシブ教育システム
  - ・ 興味のある人達は研修に参加している。
  - ・ 県教委の指針をもとにインクルーシブな考え方をとりいれている。
  - ・ まだ関わりのない方々に社会モデルを人権モデル周知して欲しい。障害ではなく社会システムに目を向けて、体制を整備する必要はある。
- ・ 教員として、子ども達の成長の様子を伝え、喜びを共有する。  
いかに楽しく子ども自身で楽しく思えるような授業や学級などをつくる工夫が大切。
- ・ 生徒指導の質をあげる。  
集団と個人、みんなにとってよりよいものは何かを考えさせ、一つの行動の意味や価値づけを大切にす。
- ・ 目の前の子どもにいつも行っている授業内容であっても子ども対大人から子ども同士の関わりなど視点を改めてみることで効果を丁寧に考えてみる。
- ・ 互いを認め合い、大切にすることで、インクルーシブな組織が構築されていく。

## インクルーシブ教育システムや共生社会の理念の実現のために

参加した皆様から、今回のフォーラムに参加して、「インクルーシブ教育システムや共生社会の理念の実現のために参考になったこと」を伺いました。一部を紹介します。



「誰にとっても分かりやすい説明は皆にとって分かりやすい」自分も心がけたいし、学校の先生にも真の意味を理解してほしい。安心して過ごせる場所があってこそ、新しいチャレンジができ、失敗しても大丈夫だと思える。そんな学校を目指して行ってほしい。  
(保護者)

同じ場所で同じ時間を過ごすことが大切なわけではなく、みんなの中で一人ひとりができることを自分の力で行うことが大切だと感じました。それを通して新たに得るものがあると、よりよい共生社会につながっていくのだと感じました。  
(教職員)

個々のよさをしっかり認め、自己肯定感を育てるだけでなく、周囲の理解、障害の有無に関わらず、安心できる居場所づくりが大切だと感じた。  
(教職員)

人と人とのつながり、人としての関係性がどんな場合でも大切だと思った。  
(福祉関係者)

大山社長が「能力ではなく人だと思った」と話されたことが印象に残りました。「人」として互いに大切にしてもらえるように「ありがとう」を素直に言える子供たちを育てていきたいです。  
(教職員)

どの人もできる人、何かができる人と捉え、その何かを生かしてあげられる社会をつくりたい。学校ではどの子ども自信をもってよさを知り、よさを表していけるように教育していくことが大切であると感じた。  
(教職員)

「できないことを子供のせいにしてはいけない」「必要なことは子供の姿から学ぶ」ということを思い出しました。教育の場では、「人に大切にされること、認められること」「学級の中で、子供全員が認められること」「大人への信頼感が育つこと」が大切だと再確認しました。  
(教育関係者)

たくさんのご参加、そして貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。県教育委員会では、これからも障害のある子供と障害のない子供が共に学び合えるようになるための学習環境の整備、指導・支援の在り方や一人一人の教育的ニーズに応える多様な学びの場の充実を目指していきます。